

最近に於ける東西関係（60・10・26）

猪木 正道（昭9文乙）

今日はお招き頂きまして誠に有難うございました。丁度今から二十年位前、三高創立百周年記念という行事がございまして大塚久雄先生という経済史の大家と一緒に私はお招きを受けて、京都で大国時代の終焉、それにクエスチョン・マークをつけた題で喋ったことがあるんですね。私は大国時代が終ったというその当時流行っておった意見に賛成できませんで、依然として世界は多極化したというけれどもアメリカとソ連は言うならば両極である。終焉していかないという意味で大国時代の終焉クエスチョン・マークという題で話を致しました。そう致しましたら聞いておられた方の中でクエスチョン・マークが非常に良かった。話の内容はあんまり感心しないけれども題の？マークは良かった、というようなご批判を頂いて非常に嬉しかったことを覚えております。それからはや、二十年近くの年月がたちまして、今度は三高会館ご主催の講演会で皆様方に対して、やっぱり東西関係、米ソ関係について、お話をすることになったわけでございます。その本

題に入ります前に一言、皆さん方にもお詫びしておきたいことがあるのです。只今、日比野先輩からお話がありました私の著作集のことでございます。今年二月から七月まで五巻出たんですね。ところが書店が想像していたよりは段違いに売れなかったんですね。これは吃驚したらしいです。書店の主人は、これ程売れんもんかっていうことですね、それで書店の主人は推薦文をお願いした。私とたまたま同じ年に昭和六年に一緒に第三高等学校の文科乙類へ入学されました、今、臨教審の会長として時々テレビに出てこられる岡本道雄先生に頼み込んだらしいです。そう致しましたら岡本道雄さんはあの忙しい中をですね。これは私、後で知ったんですけれど、自分の著作集が売れていないということも知らなかったんですね。かなり売れているだろうと樂觀致しておりましたら岡本道雄先生が主として京都の三高関係の友人、知人、先輩、後輩の方へ手紙を書いて下さって、その為にたとえばムーンバットの河野社長なんか大分無理をして頂いてですね。随分奔走して頂いたお蔭でその書店も潰れずにすんだというわけで、皆さん方にもあるいはご迷惑をおかけしたんじゃないかとこの席を借りてお詫びしておきます。

私は京都とはもう三高に入る前から縁がありまして大正三年、一九一四年の十一月五日といいますと丁度第一次大戦が始まった年でありまして、日本軍がチンタオへ派遣されまして、そしてチンタオを攻略しておったのです。もうチンタオが落ちるといふ直前だったのですね。たまたま昨日、私は朝日新聞社から私の生れた大正三年十一月五日の朝日新聞の第四面の抜き刷りといひ

ますか、ゼロックスで刷ったものをもらいましてね。偶然なんですけれどそれを見てもましたらチンタオが落ちるということが書いてあるんですね、五日の新聞ですから四日迄のことが書いてあるんですね。で、チンタオが落ちたのは確か十一月八日だったと思います。したがって私のそのお七夜といひますか、その生れて七日目の祝いには、丁度京都の街はチンタオ陥落の提灯行列で賑わっておったと父や母から聞いております。そんな時に生れまして、生れた場所は京大の付属病院でございまして、これはたまたま父が医学部に勤務しておったものですから、そこで生れたんですけれども、普通産婆さんに頼んでおたら私は多分生れてなかったんですね。と言うのは過熟児と申しましてね、未熟児というのは最近新聞によくでますけれど、過熟児というのはちよつと困るんでございまして、母があんまり勤勉じゃないものですから、ゴロゴロ寝ておたらしいです。そしたら十一ヶ月おったんですお腹に。そうしたところ生れてきた時は、もう半死半生というよりむしろほとんど死んでおりまして、「オギャー」といわないものですから。普通の産婆さんにかかっておたらそれで仕舞いで皆さん方にご迷惑かけることもなかったかと思ひますけれど、私も樂だったと思ひんです。

ところが父が医学部に勤務しておりましたものですから、笠原と言う産婦人科の先生が同僚の子供だ、しかも長男だ、何とかしてやれと随分苦勞してピチャピチャ叩くくらいじゃなくて振り回すようなことをして、いろいろされてやっとまあ「オギャー」じゃなくて「ゴロゴロ」ときわ

めてか細い産声を上げたといったような次第でございまして、それから五年間京都に居りまして、父の勤務の関係で高知の方へ移って行って、やがて三重県の上野の郷里の病院で父ははたらきまして、昭和四年に腸チフスで死にました。今だったらクロロマイセチンか何かでそれこそ一発で治ると思います。が、当時は上水道も下水道も上野の町は完備していませんので、十一月、十二月頃になりますとチフスが毎年流行致しましてどんどん死んだんですね。父もそれで患者から移されて死んだんです。

外国におりました時に父が早く死んだと言いますと、どう言う病気で死んだと聞きますから、チフスで死んだと言いますと、日本は文明国だと思っていたけれどチフスがあるのかっていいますから、いや発疹チフスじゃないんだ腸チフスだといいますと、いや同じことだ。あんな病気は文明国にはないんだ。野蛮国にあるんだ。日本は野蛮国だとは知らなんだ。そんなことで私は腸チフスが如何に野蛮な病気かを知ったような次第でして、その父も実は明治の終り頃に三高の理科乙、当時理科乙とは言わなかったんですけれども、理科乙に当るところを出まして、因縁は三分三高とも深いですけど、今日お話す問題に関しまして、実は三高から出発しておりますと言いますのは東西関係と言うのは要するに米ソ関係ですね。何故東西関係と言うかといいますと、米ソ関係というと米国とソ連だけのようになりますけれども、しかし、米国にはよく中曽根さんが口ぐせのように言われる西側という同盟国がある。ソ連には又ソ連の同盟国がある。そこ

で世界を二分したような格好になっておる。そこでもうちよつと広く言う意味では、東西と言ふ言葉の方がいいと思つてこう言う題にして頂いたのですけれども、実はこれは日本から見ますとあべこべなんです。アメリカは日本の東の方にあるんですね。ソ連は日本の西の方にあるんです。ソ連は大きな国ですから、日本より東の方にもありますけれども、しかしソ連の心臓部のモスクワとか、レーニングラードというのは日本より遙かに西の方にあるのです。それを東の陣営と呼び、日本より東の方にあるアメリカを西の陣営と呼ぶんですからこれは可笑しな話でありまして、これ、要するに地球が丸いからこう言うことになるんで、ヨーロッパ中心で考えますからすべて今でもそうなんです。そこでヨーロッパ中心に考えるとソ連は東にありアメリカは西にあるから、そこで東と言えばソ連のこと、西と言えばヨーロッパを含むアメリカ側と言うようになるわけでございます。

どう言う因縁で私が東西関係に興味を持ったかといえますと、私が三高に入りましたのが昭和六年、一九三一年なんですけれども、その頃は勿論東西関係でなものはございませんで、その当時は日本やドイツ、まだヒットラーが政権をとる二年前ですけれども、その頃はまだドイツなどヨーロッパの大国がございましたから、又ソ連はその頃そんな大きな力を持つておりませんでしたから、米ソ関係というのをもたいたことがなかったんで、米ソは国交はなかったんで、アメリカは一九一七年の十一月七日にロシア革命が起つて共産党が政権を取つてから一九三三年、昭和

八年、私が三高の三年生の時ですけれども、その時まで遂にロシアのソビエト政権を承認しなかった。だから米ソ関係はなかったんですね、その当時は。ところが当時の京都大学や第三高等学校の学生の雰囲気としては、無論例外はございましたけれども支配的な雰囲気はだいたいですね、マルクス・レーニン主義は非常に有力でございまして、弾圧されておったんでございます。

なんとなしに日本共産党の勢力が京都大学や第三高等学校に迫っているような感じが致しました。例えば三高の横を歩いておりますと京都大学の学生が近づいて来て、そして日本共産党の為に金を出してくれと言うようなことを言うんですね。だから私はそんな政党的な金を出さうなことはしないと断ったんですけれども、私の友人の中には、金を出して共産党の為に金を出すようなことについて自慢しているものもありました。又、当時はソ連といいますと何かユートピアのような印象を与えておりまして、日本が、その当時の日本が今日の日本とは比較にならないくらい貧しい、しかも貧富の差がはなはだしい、非常に悲惨な国でございました。従ってそういうことを忘れた議論が最近日本では多いんですけれども、その昭和六七年の東北、北海道の飢饉というのは大変なもので、京極へ出て募金運動をやった覚えがございします。その募金していたお金を現金で送ったんでは胡麻化されてしまう恐れがあると言うんで、寒い所だから毛織物を買ひ込みまして、それから醤油、味噌その他の食料品を買ひこんで送ったところが大変な札状が来まして、子供が書いた札状なんかもう感激しました。それはお蔭で冬を暖かく過ごすことができたという札

状が来ました。そう言う募金運動、これは共産党とは何にも関係ないんで純粹な募金運動だったんですけれども、その募金運動をやっておりますら、当時京都で或いは日本でもっとも有名な女優の一人でありました入江たか子が私共の義捐金箱の前を通りましてね。そして十円札を、當時猪と申しまして大変価値があつたんですけれども、その十円札を財布から出して入れてくれたんです。もう非常に感激致しましてね。入江たか子のファンになりました。それから伏見直江がその妹ののぶ子を連れてやっぱり通りましてね。これも十円札か五円札か入れてくれた記憶がございます。そんな事で当時の日本は悲惨だったのですけれども「おしん」でテレビを通じていかに日本の農民が悲惨な状況であつたかと言うことが、全日本に放送されたんですが、あれは決して誇張ではございませんで、特に東北・北海道の地方の農民は大変苦しんだ。三高は不思議な学校でございまして、関西にありますのに東北・北海道出身の人が多いのです。「北斗会」と言う会を作っておられたようですけれども、そんな関係もありまして義捐金の募集をやった。

そうするとソ連と言う国は誰も行つたことがその当時なかつたのですけれど、なんか理想の国であるというイメージが三高生や京大生の間には非常に強うございまして、そして政府が弾圧すればする程、魅力が出て来るわけですね。丁度中国と日本と、北京と日本との国交をアメリカの圧力で正常化できない、台湾という島が全中国を代表するかのような、これは私は二十世紀最大の嘘だといったのですけれども、そう言う嘘が罷り通つておると日本人の中に何か中国をまるで

ユートピアのように、天国のように考へてゐる人が出て来て、いろいろ可笑しなことが起つた。文化大革命を何か人類史上空前の壮大な革命だといつて喜んでゐる人が沢山おりましたが、そんな馬鹿なことはないんでございまして、あれは人類史上空前の途方もない野蛮な変革でございまして、どうもその外国の妙な現象に迷わされることが、我が国では少なくないようです。私が丁度高等学校におりました頃は、ソ連はもう天国である。非常に平等で自由で、丁度抑圧されておる不平等な日本の正反対の国であるといつたようなそう言うイメージが学生の間に強かつたのです。私はどうも生れつき少々「天の邪鬼」などところがございまして、皆がそういうふうにつておるとどうもそうじゃないんじゃないか、それは嘘じゃないかというふうに考へる癖がありまして、今でもその癖はなおつておらないのですけれども、私はどうもそれは疑わしいと思つておりまして、三高の図書館にですな『ノイエ ルンドシャウ』というドイツの月刊誌がきておりまして、これは日本流に訳せば新評論となりますが、大要この知的な高度の雑誌でございまして、内容には文学評論有り、政治評論有り、たまには経済評論も載る、社会評論も載るということで、ドイツの高級インテリが読む雑誌でございました。それを先年亡くなりました、やつぱり三高の先輩で古松貞一先生が、図書館で取りになつておつて、それを一九三二年、昭和七年の秋だったと思ひますけれども、私は図書館で借り出しまして読んだんですな。それを読みましたところその中にソビエト紀行というソ連を旅行した旅行記が載つておつたんです。ドイツ人が一九三二年の

春頃に第一次五ヶ年計画の最中でございますけれども、その春頃にソ連を訪問した時のその体験談です。それを読みますとですね非常に私は感激したのでございます。と言うのは非常に抑制した押えた調子で書いてありましてね、えー、淡々と書いてあるんです。ところが読んで見ますとソ連の実像が、実際の姿が、日本の学生やインテリが懂れているようなそう言うユートピアとは違うわけです。いかにスターリンのソ連というものが暴力的抑圧をする恐ろしい社会であって、そして社会的不平等は、日本と比較はしてございませぬけれど、一般の資本主義国と比べてみても勝るとも劣らんくらい不平等が激しい。自由なんかないと言うことがですね、非常に具体的な例で書いてあるんです。たとえば工場の労働者の食堂、それが特権的な労働者、つまりノルマを百パーセント以上二百パーセントも果たした特権的労働者と党の役員とだけが、食べられる上等の食堂と、そしてガラスをへて向う側に一般の労働者の食べる食堂とがあつて、そこで提供される食物がまるで違う。その特権的な人々の食べる食堂の食事はまあまあいいと、しかし一般労働者の食べる食堂の食事はもう酷くて、とても西ヨーロッパ人には食べられたものでないというようなことが書いてあるんですね。そのことはちょっとも知らなかったものですから、非常に私は感心しまして、こりやソ連を見る場合には十分に注意してみないと宣伝されている事とは大分事実とは違うらしいということを教えられた。そこで大学へ進みまして東大の経済学部へ行つたんですけれども、そこで私は演習でロシア革命をテーマに致しました。

その当時は三条の青年会館に早稲田大学の先生がやって来て、ロシア語を冬休中二週間で教えてくれるという講習会がありまして、その講習会に精勤致しまして、そしてそれこそ冬休み中ですから、十二月二十四日頃から一月の七日頃までですけど、その二週間の間にすな、その教えてくれる時間は一日三時間くらいなんですけれども下宿へ帰りまして、もう三度の食事以外は、そして短い睡眠時間以外はロシア語に没頭するという程、私は打ち込んだんです。私は語学の才能は残念ながらないのですけれども、そういう熱心にやりますと、二週間でほぼ八杉さんの編纂されたロシア語の文法は一通り頭に入った。そう言う次第で大学生の頃にはロシア語は止めたんですね。今はすっかり忘れました。もうソ連へまいりまして出てくる単語は百くらいしか出てきませんので、もう一切通訳を介しないと用を足すことができませんが、そこでロシア革命史というものをテーマにして勉強した。勉強してみるとますます『ノイエ ルンドシャウ』という雑誌のつたソ連観が正しくて、一般に日本の知識人や左翼の人が持っているソ連観と言うのが間違っていることはますますよくわかって来た。そこでそれをまあ、私の演習の論文に致しまして卒業したわけです。それが、勿論出版できませんので、ようやく一九四八年、昭和二十三年の二月にロシア革命史と言う題で出版することが出来まして、それが私の著作集第一巻に入っているわけですけど、そんなことで私のソ連に関する研究は、もう今はソ連の専門家じゃありませんから、研究というところとちょっと大袈裟ですけど、ソ連に関する関心といえますか、それは第三高

等学校の二年生の頃から始まっておるといことを申し上げておきたいのであります。

ところでソ連というのはご承知の通りロシアでございまして、ロシアとアメリカが幕末の日本を脅かした、そして開国を迫った、まさに東西の両大国、アメリカ合衆国とロシアでございいます。幕末の日本があゝ言うふうにして明治維新をやって、そして近代化されたのは、それは北の方からはロシアに脅かされ、そして東の方からはアメリカ合衆国のペリーの率いる艦隊に脅かされて日本は開国を迫られたからであります。まさに米ソによって、当時はそうじゃありません、米ロによって日本は近代化された、近代化の切っ掛けをつかんだといっても過言ではないわけでございます。ただその際に注目されますのは、アメリカのペリー提督はスマートでありました。なかなか今でもアメリカ人というのはスマートでありまして、今度の地中海でのイタリアの客船を乗っ取ったハイジャッカーを乗せたB七三七と言うアメリカ製のエジプトの飛行機、その飛行機がチュニスに向う途中を、地中海艦隊の航空母艦から発進したF一四というアメリカの海軍の戦闘機が、それを阻止してみごと強制着陸させて、そして犯人を捕まえたというくらいです。主犯のバスというのだけは、それが犯行に加わっていたことをイタリア当局がすっかり致しまして、逃がしてしまったのですけれども、アメリカは非常に怒るとるんですけれども、しかし実に鮮やかでありまして、これは大韓航空機を撃墜したソ連の無様なやり方と比べますと、その腕前に横綱とそれこそ幕下ぐらいの違いがあるんじゃないかと思ひます。もしソ連の防空力がアメリカの

程度のものであれば、大韓航空機が沿海州に入る前に、サハリン上空に達する前に、カムチャツカ半島の上空を侵犯した時にすでに迎撃機によって、それを強制着陸させておったはずでございます。そうすれば二百何十人の乗客も命を失わずにすんだんです。ところがソ連の防空力は無様でございます、これは世間ではソ連の軍事を過大評価して、今にも北海道が取られそうなことを説いておる人がいます。もちろん油断は禁物でありまして、いろいろ備えとく必要はありますけれど、とてもソ連にはそう言う力はございません。日本の北海道を取ればアメリカと対決しなきやならない、アメリカと対決すれば、ソ連はよくても引き分け、ということとは共倒れ、悪くするとソ連の方がやられてしまうということをソ連は知ってますから、ソ連の指導者というのは大変慎重、臆病な程慎重でして、石橋を叩いてからでないとなかなか渡らんし、場合によっては石橋を叩いてからも尚かつ渡らんくらい慎重なところがあります。そこでソ連の軍事が実際よりも強いように宣伝するのはソ連の非常な得意なところとして、それをアメリカが助けているようにあるんですね。

アメリカっていうのはソ連に対抗する為の軍事を整備する必要があるんだけど、それにはアメリカの議会の承認を得ないとお金が入らない。アメリカの議会を説得しようと思つたら方法は一つしかないんで、それはソ連の方が強いぞと言うことを宣伝することなんですな。そうするとアメリカ人というのはものすごく負け嫌いですから、こんどもレーガン大統領がハイジャッ

クした犯人を強制着陸させて、アバスを除く直接、アメリカ人を殺した犯人を皆捕まえたということが発表されますと、もうアメリカではデモの波でして、アメリカは再び世界一であると「ユニナイテッド・ステーツナンバーワン・アゲイン」アメリカは再び世界一だという大きなプラカードでデモをやる。そう言う愛国心が強いというとまあ、聞えはいいんですけど、多少それが行き過ぎのともあるのが、アメリカの特徴でございます。そういうアメリカ人を相手にして戦ったらソ連はとてものかなわんと言うことをソ連は知ってますから、そのアメリカと日本とは非常に深い同盟関係にあることも知ってますから、だから日米安全保障条約が骨抜きにならないかぎりには、ソ連はそう簡単に北海道とか、或いは新潟とかにやって来るといふことはないんですよ。しかし日本自身の努力がないとアメリカばかりに頼っていたんじや、そりや、天は自から助くる者を助くるんで、いわんや天でもないアメリカがですね、自ら助ける意志と能力を欠いた日本を助けるはずがないので、その辺のところが、難しいところでございます。

それじや日本が襲われた場合にかならずアメリカが助けに来るかと言うと、これはそんな保障はございません。これは私結婚式で何度か披露宴に招かれて、そして新郎新婦が仲睦まじく語り合っておる情景とか、或いは結婚式に招かれて、そこで牧師さんや神主さんの前で終生愛を誓い合うという情景を見ておりますけれど、それから一月程して一緒に結婚式なり、披露宴に出た友人に「あの二人はどうしてるかな」と言いましたら、これも三高の先輩なんですけれども、

名前は申しませんけどね。その新郎のお父さんも三高の先輩なんですけれども、これも名前申しませんが、「君、知らんのか」といいますから「どうしたんか」といいましたら「いやああの二人はもう別れたよ」というんですね。いや驚きましてね。私はあれ程盛大な福田、当時の副総理が媒酌をして、松下幸之助さん以下財界の大物がずらりと出た。そういう盛大な披露宴をした新郎新婦がそんなにあっさり別れてしまうものかと思ったんですけれども、個人の間すらそうでございますから、いわんや国家と国家の間の約束でなもんはこれは守られるという保証はないわけです。だから従って、日本が襲われた場合に必ずアメリカが助けに来ると言う保証はどこにもないのです。だけでもそれはなくていいんです。そんなものは得ようとしたらこれは不可能なことで、そんな保証はなくていいのです。そうじゃなくてソ連の立場から見ただけの場合に日本を襲ったらアメリカも相手にしなくてはならないぞと、ソ連が考えればそれで十分なのでございます。そうすればソ連は慎重な国でありますから、そら大韓航空機は打ち落しても、あれがJALとか、或いはパナムであつたら、恐らく打ち落すこともなかったことだろうと思われまます。そう言うようなわけで非常に慎重な国でありますから、そういう、つまりアメリカとも戦わなきゃならんかもしれないと言う危惧の念をソ連の指導者に抱かしておけば、日本は安泰だと、それを抱かす為には日米間の安全保障条約に血が通っておつて、日本も応分の自衛の努力はしておるしアメリカとの関係も貿易摩擦にかかわらず極めて政治的には安定しておると言うことを、ソ連に

示す必要があるわけです。

今日の様な宣伝の時代でありますから、そう言うことが事実上あっても、それを宣伝しなければ効果ないわけですね。ところが話はちよつと逸れたんですけれども、ソ連の軍事力が過大評価されるのは、ソ連自身が過大評価されるよう過大評価されるようにするわけです。一方アメリカの方はそのソ連の軍事力に対抗するために予算を獲得しようとする、ソ連が強いソ連が強いと言うことを、アメリカの大統領や国防長官ワインバーガーさんなんか盛んに宣伝する。その宣伝は実はアメリカの国会向けでございまして、議会向けでございまして、それをするることによつて、アメリカの議会から金がほしいわけです。それを又、日本の知識人の中には本気にする人がおりまして、本当にソ連の方が強いと思つて人がおるんですね。ソ連の方が強いと思つて人が多いのに驚いたのは、私が近頃めつたに新聞や雑誌に書かないのですけれど、一ヶ月程前にある新聞にちよつと書きました。ソ連に関しまして書きましたところが、早速投書が舞いこんで来まして、その投書の中には、アメリカの軍備はもう骨董品の山のようなもので、日本はもつと酷いけれども、アメリカの武器はソ連の武器に比べると段違いに劣つておるので、従つてアメリカの方がうんと弱いと、だからそんな国と同盟しておつて一体何になるんだといった意味のことが、書いてあるんですね。それはよほど暇な人とみえまして読むのがとても時間がかかるような細かい字で、書いてある。そんなもの読まんで捨ててもいいんですが、まあしかし面白いから読んだ

わけです。その話を友人にしましたら自分とこもその男から来たというんですね。群馬県の人なんですけれどね。でしょっちゅう、毎日暇があれば誰かに対する反駁文を書いて生甲斐にしている人らしいので、その人に対して私は暇があれば返事をして差し上げたいと思ったんです。

いかにアメリカの兵器が、ソ連の兵器に比べて勝れておるかと言うことは、かずかずの機会に示されておるんで、たとえば今から三年前になりますか、イスラエルがレバノンに侵入しました時に、レバノンの上空でシリアの空軍、これはソ連のミグ二三という最新鋭の戦闘機を使っているわけです。これとイスラエルの空軍が激突したんですね。ところがその結果はどう言うことになったかと思えますと、八六対ゼロと言うんですね。これはラグビーでもアメリカンフットボールでもめったにないスコアでありまして、と言うのはイスラエルの空軍は一機も失わず、それに対してシリアのミグ二三は八六機落されたんですね。これはまあいろいろ考慮しなきゃならんことがあるんで、イスラエルの空軍は非常に練度が高い。それに対してシリアの空軍は、アメリカの空軍と比べてどう言うことじゃなくて、そのイスラエルの空軍と比べると、練度が非常に低い。で、ソ連のもし空軍のそのパイロットがミグ二三を操縦しておったら、果して八六対ゼロになっておったかそれはわかりません。だけでもミグ二三と言う非常に宣伝されておって世界一だといわれておる戦闘機が、これが存外脆いものであると言うことが証明された。それから戦車ではT七二という戦車が世界一だと言われておったんですね。ところが同じレバノンの戦闘でイ

ルラエル軍の戦車と激突致しまして、イスラエルの戦車はほとんど無傷でT七二はボカボカやられてしまったのですね。それを見ましても、これもまあ、操縦している乗員の素質の問題とか、練度の問題もありますから、一概に言われませんけれども、しかし世間で考えられている程ソ連が強くないということが言えるんです。

この大韓航空機の事件でもそうございまして、もし防空力が本当に強かったらですね。もうカムチャツカ半島の上空でキャッチして、そしてそれをインターセプターで、迎撃機でストップして強制着陸させる。ところがレーダーでは捕まえたのですけれども、迎撃機で大韓航空機に追いつくことができないのです。これはもう大変な失態でございます。そうすると今度はサハリンの方向に向いているんですから、サハリンのつまりカラフトの、ソ連防空軍の司令部に対して、お前の方に向いて飛んでいつているから、もう二時間近くするとお前の方に行くから用意しておれと言うことを言ったはずなんです。そうすれば高度一万メートルくらいの上空にその迎撃機を飛ばして、そして待っておれば間違ひなく強制着陸させることができたんです。ところが又逃がってしまったんですね。よほどこれ無様ぶざまでございますね。これは飛行機の性能が悪いのか、防空軍の命令系統になにか欠陥があるのか、技量が悪いのかわかりません。専門家じゃないからわかりませんが、又逃がしてしましまして、とうとうサハリンを出ようとするところでやつと追いついて撃墜した。だからあ、言う野蛮な事件を起こしたのは、いろいろ理由があるとは思

いますけれども、決定的な要因はソ連の防空能力の欠陥でございます。そう言うわけでソ連にはいろいろ欠陥もあるわけで、そう強いばかりではないわけでございます。

ところで今日、皆さん方に申し上げたいと思うのは、東西関係ですからソ連のことばかり申し上げていられません。アメリカのことにも触れますけれど、まずソ連の方の最近の事情についてちょっと話して、それからアメリカの方に移りまして、そして二時五十分十分に始まった話でございいますから、皆さんも長く話を聞いておられるとお疲れになると思うんで、どんなに遅くても三時二〇分か三時半までには必ず終りますから、その後、皆さんから何でもご質問頂いて、或いはご意見を頂いて答えさせて頂きたいとこう考えています。

そこで最近のソ連ですけれども、最近のソ連を見ます場合に、まず第一番に考慮に入れなければなりませんのは、ゴルバチョフと言うあの五十四才の指導者が、政治局員中、最年少で書記長という一番重要なポストについたというのは、これは誠にソ連の歴史に取っては画期的なこととでございまして、その十年前、つまり一九七五年からですな、私は昭和と言う年号をつかうと混乱してくるものですから、なるべく西暦で申しますけれども、昭和に換算しますためには七五年から、えー七五年から二五を引けばいいわけですし、昭和と言うと五十年と言うことになりますな。その一九七五年頃からソ連と言う国は、実は言うならば当事者能力を失っておったのです。当事者能力というのは法律の用語かもしれませんが、要するに、非常に品のない表現を使いますとよ

いよいよなつていたといひますか、そう言う状況にソ連はなつておつた。何故かと言うと最高指導者のブレジネフが、その頃から健康が非常に悪くなりまして、それ程の年ではなかつたのですけれども、動脈硬化が相当進行致しまして、人に支えられないと階段なんか満足に降りられない。そう言う状況になつて来たんです。私ももう七十才でございますから、大体ブレジネフのその頃の年になりましたんでわかるんですけれども、私はブレジネフ程動脈硬化していませんけれども、だんだん思考能力、判断能力、推理能力そう言うものが衰えてくるんですね。そうなつたら日本だつたら予算委員会で首相は答弁しなきゃなりませんから、そう言う責任あるポストにおられませんか。予算委員会の質問は、その場で質問があつてその場で答弁しなければなりません。日本の総理大臣が一九七五年のブレジネフ程度にまで健康を害すれば、勿論辞めなきゃならんです。福永さんなんかそこまで行つてなくても、後ずさりできないだけで衆議院議長をやめたんですから、そう言うことを考えますと日本のような民主主義国というのは非常に健全な制度でございまして、国会で答弁ができなくなつたら、もう最高指導者は退陣するということは当然でございします。

ところが共產主義体制の国の場合は死ぬまでやっているんですな。これは誠に不思議でございまして、私は決つて老人を軽蔑するわけじゃなくて、私自身がもう老人ですから敬老の精神は持つておりますけれども、国家の最高指導者といったようなそう言う非常に緊急の判断をしなきゃ

やならんようなポストには、これは七十才を越えたらなってはいかんですね。個人差はありますから、五十才でも七十才以上に老けている人もあれば、七十才でも五十才ぐらいの力を持った人もおるかもしれませんけれど、一般論でいえば、もう中曽根さんの後継者問題でも、チラホラ名前が出る人のなかに八十に近い人もおりますけれども、これなんか以ての外だと思うんであります、これは中曽根さんより少なくとも若い人がならないとよくないと思うんですけれども、ブレジネフの一九七五年の状態は酷かった。だんだん酷くなりましてね、とうとう八十二年に死んだわけです。ところがあの国は酷い国ですよ。残酷な国ですね。亡くなったときの様子、皆さん思い出して頂きたいのです。一九八二年十一月七日に革命記念日で、赤の広場で軍隊の観閲式・親兵式が行われた。そうするとそう言う場合、もし日本でしたら指導者が高血圧動脈硬化で困っているという場合には「こんな寒い時に同志ブレジネフよ、出て行くな、我々が代りにやるからお前休んでおれ」と言うんですけれども、あ、言う国ではまさに死なんとしている指導者をですな、あのモスクワの十一月七日と言いますと、場合によったら零下二十度位になるんですね。その日も確か二十度に近かったと聞いています。そこで二時間半もですね、壇上に立たしたのですよ。これはもう殺人行為じゃないですか。しかもそれが嫌ならば指導者の方で辞めればいいじゃないですか、自分は健康を害したから辞めさせてくれと言えればいいじゃないですか。ところが辞めないんですね。不思議に。ブレジネフが死ぬまでやっただけではありません。それを継いだ

アンドロポフも私と同じ年なんですけれども、これは私よりはるかに健康が悪いとみえて就任後数ヶ月で、こりやソ連の場合、指導者の健康の状態は、一切わかりませんから、推測の域を出ませんが、まあ間違いないと思われるのは腎臓病の大分酷いになりました、人工透析を受ける状況になって、ゴルバチョフを通じて仕事をしとったことですね。それでも辞めないうですな。とうとう辞めたのは死んだ時なんです。

もうそれで二代よいよいに近いほとんど半病人に近いというか半死人の人が、指導者やつとつたんだから、この辺で一つ生きのよいのに出てもらおうじゃないか、と言うことになりそうなんですけれども、私が一番驚いたのは、このアンドロポフが死んだ時に、後継者になったのがチェルネンコなんです。アンドロポフより年上なんです。しかもイギリスの外務大臣をしておりましたオーエンという人が、チェルネンコに会いまして、そしてこのオーエンと言う人は医者さんでして、そして握手をして話をしながら診断したんですね。その結果、これは肺気腫であると診断を下した。どうも間違いないらしいです。そう言う様な酷い状況の人を、七十何才になっていましたか、たしな七十四才くらいになっていたんじゃないかと思えますね。それをその書記長に選んだ、そうするとこれはもう殆どもう半病人と言うより病人でございますから、ソ連という国はチェルネンコが書記長である限り、当事者能力がない、と言へるのです。レーガンの方から首脳会議やろうといってもですね。そんなもん肺気腫で死にかかっている患者ではとても対応で

きない。だから首脳会議が本当に長い間隔を於いて、この十一月の一九、二十日行われると言うのは、そらゴルバチョフと言う生きのいいのが書記長になったからでありまして、それだけでも私はゴルバチョフは大きな功績を果たしたと言えると思うのです。若さだけでもですね。それは単にソ連のためのみならず、人類の運命にとっても私はいいいことじゃないかと、世界を二分している超大国の一つが半病人もしくは病人によって統治されていると言うのは、これは困った状態として、本格的な米ソ交渉というのは不可能でございます。

ところがゴルバチョフが三月に書記長になりますと、颯爽と登場してまたたくまに政治局のメンバーで七十を越えているのを皆辞めさせましたね。そして最後に総理大臣で八十才だったチーホノフを解任した。八十才で総理をやるって神経が私には分らないんですけれどもね、いくら健康な人でも八十才になったら顧問か何かをやるべきで、日本でも最高顧問会議というのが自民党にありまして、いろいろ発言しておられますけれども、人によってはあれは最低顧問会議だと言われる。どうもお仰ることが支離滅裂で、どうも少し日本も老害が甚だしいんじゃないかと思うのですけれども、幸いにして総理大臣以下皆、元氣でありますから、最高顧問会議の言うことは、まあ、聞いておけばよいんで従わなかったらいいんですから、それ程の弊害はないと思うのですが、チーホノフを辞めさせて、ルイシコフと言う五十六才の非常に生きのいいのを総理大臣に致しまして、そして外務大臣も、グロムイコと言うのは二十八年やっていたんですな。どうで

すか日本と両極端でございますよ。

日本では安倍さんが三年やったのが、これがレコードだと言うんですね。大体毎年代るんです。短い人は一月でやめておるんです。私は防衛庁にも八年お世話になったんですけれども、その間に防衛庁長官が十回代わりましたよ。私が京都大学から防衛大学校へ行く時に向うが申しましたのは、防衛庁に来てもらうのは、年一遍か二遍位だと言う話でした。これは仲人口ですな。私もそのつもりで横須賀へ参りましたところが、殆ど毎週一回ぐらい防衛庁へ行かなきゃならんです。大変煩わしい。防衛長官が変わる。そうすると政務次官もかわる。そうすると防衛庁長官のその辞める辞任式、着任式、防衛政務次官の辞任式、着任式、その都度榮譽礼とか長い音楽を聞かされてまして、そして本当に私ね、こんなことをしとって日本の防衛は大丈夫かと言うことを感じたのです。そういう暇があったら訓練に励んだらどうだろう、もつといろいろ研究したらどうだろう。そう言うことをしないで、一年に一回ぐらい防衛庁長官をかえとつちや外国からも信用されないだろう。で、ブラウンというカーター政権の国防長官が日本へ来ました時に、日本のある防衛庁長官に對しまして「お前は、自分の着任以来会った四人目の防衛庁長官である」と言ったと言う有名な話があるんですね。くるくる変わっていきます。誰がやっても同じだから回転を早くして皆にならそうということらしいですね。非常に私はこれは不真面目だと思うのです。ところがその又反対の極端がソ連でございまして、一九五七年ですから、昭和三十二年ですか、三十二

年に外務大臣になりましたグロムイコは、なんと二十八年間外務大臣やっとなんですからね。これは長すぎますよ。これはなんぼなんでも長すぎます。

これは日本のように一年たらずか一年ぐらいで、変えるのもよくないが、二十八年間というのは長すぎる。そこでゴルバチョフは、彼を最高会議幹部会議長という名譽職に押し上げて、後へシェワルナゼという変な名前の、これグルジアの人ですけれども、非常にスマートで、そして頭の切れそうな、しかし外国にはずぶの素人というのを持って来て、もともと警察官僚ですね。警察官僚であり党官僚です。これを持って来て外務大臣にした。グロムイコは日本に来てくれという日本の外務省・外務大臣の要請に対して「ニエツト・ニエツト」といっておったわけですけれども、シェワルナゼにかわった途端に、年末もしくは来年の初めに行こうと言って、やっと一月中旬に来ることが決った。人が代わるとソ連では政策が変わるんです。だからソ連の政策をズーッと振り返って見ますと、例えばドイツのことをぼろくそ、こてんばんにいっておったのが、いつのまにか独ソ不可侵協定を結んだ。一九三九年、昭和十四年の八月二十三日に結んだ。これはどうして、それが可能になったかという、リトビノフという外務大臣を首切ってモロトフを外務大臣にしたから可能になったんです。だからソ連の政治を見えます場合は、人がかわった時には大きな転換があるということを、考えなきゃならんですな。だから北方領土の問題でも、諦めている人がおりますけど、私は諦める必要はないと思うんです。シェワルナゼになれば解決

ずみの問題でない、やっぱりよく考えてみるとまだ、いやまだ未解決の問題であつたと、解決済だといつておつたけれど、よく考えてみればソ連側は解決済といい、日本側は未解決といつておるんだから、やっぱり未解決だといろんなことをいって、平和条約の交渉に応ずるかもしれない。ソ連の場合は人がかわりますと政策がかわりますから、こちらもそのつもりで応ずる必要があるんで、それも何時までもグロムイコのようなあ、言う「ニエツト・ニエツト」の硬直した外交をしておると思つて安心しておると、大きな過ちをおかすということになると思うのでございます。

ところがゴルバチョフは人事の大幅な更迭をやつて、若返らして、そして何をやつたかと申しますと、対米関係に關しましては、主として平和攻勢であります。平和攻勢をやつたのは意味が十分あるのでございまして、何しろレーガンが、あゝいう、何ていいますかな、勇ましいでしよう。これは口の悪い人は、あれは戦争屋だと言いますね。好戦的だと、僕は好戦的だとは思いませんけれども、とにかく勇ましい。カーターなんかと比べればうーんと勇ましい。レーガンが登場した時に真先にやつたことは軍備の拡充です。これは私はね、ある程度評価していい面もあるんです。と言うのはカーター政権の末期にイラン人質事件で、アメリカは非常に恥をかいたんですけれども、あの時にカーターはヘリコプターを飛ばして救出しようとしたね。皆さんよく覚えておられると思います。カーターが辞任する前年のことでございますけれど、その事件のこと

を私、少々詳しく調べてみたんですけど、わかりましたことは、あの救出作戦はもうファイフティファイティ以上の成功の公算があったのです。というのはイラン側では、テヘランの近所の某所へその救出用の飛行機を着陸させれば、そうすればアメリカ人と人質は皆そこへ無事にとどけて、そしてその飛行機が無事に離陸するように手配ができておったんです。イランの外務大臣までがそれにかんでるんですから、ゴトブサデーという変な名前の外務大臣ですけど、間違ひなく成功するはずだったんです。その成功するはずの救出作戦が失敗して、カーターだけじゃなくて、アメリカ合衆国そのものが大恥をかけたのは何故か。今度のレーガンさんの地中海上でハイジヤッカーの拉致事件のように、うまくいかなかったのは何故か、と申しますと、それは核兵器の問題じゃございませんで、通常兵器で武装したアメリカの陸海空軍がカーター政権の末期に、非常に戦力を失っておったのです。これは非常に大事なことなんです。

よく日本で自衛隊は訓練をやっておるけれど意味ないじゃないか、このボタン戦争の時代に日本は核武装をしないんだから、核兵器でソ連がやって来たら全く歯がたたないんじゃないかという方がおられますけれど、大きな間違いでございまして、核兵器は使えない兵器でございまして、長崎で落ちてからもう四十年以上になりますけれど、いつも使われてないんです。私はこれからも恐らく使われないだろうと思います。絶対に使われんということとはこれは絶対にいえませんが、しかし使われない公算は相当大きいと思います。というのはあれを使うと限りがなくなっ

て、その結果、核の冬といった現象がおこるか、あるいはそれに似た現象がおこって、人類全滅になる恐れがある。全滅しないまでも殆ど死んでしまう恐れがある。文明は滅びる恐れがあるということ、米ソの首脳者はともに知っています。

我が国でも自衛隊が訓練していることは意味がありまして、核兵器というものは、両方が使わないようにお互いにしあつておるので、その意味で抑止力でございまして、日本はアメリカとの間に日米安全保障条約を結んでいるものだから、ソ連はSS20を日本に落すぞといって脅かすことはできないのです。日本がもしアメリカと同盟を結んでいましてしたら、ソ連は何時でも日本に対してそういう脅かしをかけることができる。脅かしをかけられると、もうSS20というのは広島や長崎に落ちた原爆と比べると比較にならない程破壊力が大きいですから、日本人は震え上ってパニックに陥る。だけでも何故そういう脅かしが効かんかといいますと、アメリカ合衆国の同盟国だから、もし日本の横須賀を、あるいは厚木を、あるいは岩国を、あるいは横田を攻撃すれば、そうすればアメリカとの対決は避けられないかもしれない。そうすると熱核戦争になって、ソ連も共倒れだとソ連の指導者は知ってますから、だから日本に対して核の脅かしをかけない。だから日本では、通常兵器で武装した自衛隊の訓練をやっておれば、それで十分だということに一応なるわけでございます。ところでそのカーターにも功績はいろいろございます。ニクソン時代の悪い夢を払拭したというので功績があるのです。しかし通常兵器で武装したアメリカの陸海

空軍を強化すること、整備することを怠っておったというカーターの責任は大きいのです。その証拠にあの救出作戦はヘリコプターがですね、もう三機か四機あれば成功しとったのです。ところがたった三機か四機のヘリコプターが足らんかったばかりに、あの救出作戦は見事大敗に終わったのです。

どういふことかと申しますと、あの強大なアメリカの空軍です。ヘリコプターの救出作戦という非常に重要な作戦に使えるような、しかもあの砂漠の砂埃りの中を飛んで間違ひなく目標に行けるヘリコプターが不足していた。目標はテヘランでなくて、テヘランの大部手前です。そこでC百三十という輸送機に乗りかえるわけですけども、そのC百三十という輸送機はエジプトから飛んで来ているんですけども、これはもう条件が悪い、暴風といつてもいい程の風が吹いて、砂埃りが飛んで悪い。そうするとヘリコプターが次々と故障おこしまして、中には極めてプリミティブな故障があつて、絶対にその上に物を置いてはならんという部分に、乗員の救出に行くアメリカの兵隊のひとり、自分の雑囊のようなものを置いたんです。それでそのヘリコプターは、故障おこしてアウトになったんです。で結局、全空軍から漸く掻き集めた十機ばかりのヘリコプターのうちで、三機四機と故障がおこりまして、その結果断念せざるを得なかったといふことになったわけです。もう三、四機十分に整備されたヘリコプターがあれば、カーター大統領は人質を救出することに成功して、恐らく再選されておつたことでしょう。再選されたことが、

アメリカのために良かったことかどうかわかりませんが、とにかく、カーターという人は個性的な人でくるくる変わるんですな。意見が。神と直結されているんです。神と直結されていますから、お祈りをする意見がパツと変わるんです。ちょっと、これ困るんですね。彼が何を考えているのか、予測不可能なんです。そういう人が大国の指導者になるということは非常に困るんでございまして、たとえば朝鮮半島から第二師団を撤兵するということを公約して大総領になったところが、朝鮮半島からつまり、韓国からアメリカの第二師団を撤兵しますと、北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国にとってはそりゃ、もう、非常に大きな機会を提供することになるんです。だから私は必ずその場合に金日成主席が韓国に侵入したであろうことを、断言するわけではありませんが、そういうことになった可能性はあるわけなんです。だから第二師団というのは彼処へおいておかないといけないのです。彼処へ置いておくことが非常に朝鮮半島の安定に貢献しているんです。これは間接的に日本のためにもなっているんです。日本人も安心して寝られるんです。

朝鮮半島でドンパチやられたら、我々はもうどうなりますか、この前の朝鮮戦争のときは我々は占領下でしたから、アメリカに対して、何も言えなかったのですけれども、今は日本から出撃する場合には、日本政府と事前の協議が必要になっていきますから、日本は責任が重い。状況が違います。従ってそういう点から申しますと、ソウルと三十八度線の間に展開されておる第二師団

というアメリカの軍隊は、なかなか大きな役割を果たしているんです。たった一箇師団ですけれども、これは大きな平和維持の機能を果しておる。そういう第二師団を撤兵するといっておいて、そしていざ大統領に当選致しますとだんだんそれが怖くなりまして、公約を破棄して、やっぱり第二師団は留めておくといひました。これはいい方に気が変ったんだから良かったんですけれども、そのほか中性子爆弾を使うといひましてね。これは人は殺すが物は壊さんという妙な兵器でありまして、非人道的といえれば非人道的ですけれども、そんなことをいっただらあらゆる兵器は非人道的です。ところがそれに対して、ヨーロッパ諸国は反対したんですけれども、ようやくヨーロッパの総理大臣なんか、一生懸命になって説いて、英国や西ドイツやなにかの総理大臣が国民を納得さして、ようやく中性子爆弾を導入すると決ったら、カーターさんはやめたといひだしたのです。そこでカーターさんの言うことに振り回されたらかなわんという氣持がヨーロッパに広がりまして、大変ヨーロッパのアメリカに対する不信感をあおったのです。

時間の関係もありますんで、もうソ連の話を終ってからアメリカに移るというのをやめまして、ソ連の話をしながらアメリカのことについてもお話することに致します。それに比べるとレーガンさんは、これから申し上げますようにSDIと言う戦略防衛構想という、とんでもないことをいいました。あれは実は動機は悪くないと思うんですね。よくいわれることですけれども、防衛的な物である。人を殺さない。防衛的な物である。そして非核兵器である。これは怪しいですけ

どね。レーザーを、強力なレーザーを発射するために、起爆剤として小型の核兵器を使うんですけれどもね、だけでも、とにかく非核兵器である。防衛兵器で非核兵器である。だから大変こりやいいんだということをレーガンさんは言うんで、あの辺のところがどうも信用できませんが、取り敢えずSDIと言うことをいいだした点は、ちょっと問題でありまして、動機は悪くないんですけれども、あれをやりますとソ連は必死になって反対をして、それに対抗するためにいろいろ方策を考え出す、参謀総長は自分達もやると言うことを最近いいだしましたが、それまではソ連は、アメリカのSDIに対しては他の方法で対抗する。それはどうするか。攻撃用の核兵器を今の二倍、三倍にする。そうすればSDIは十分な効果を発揮できなくて駄目になると、そうなりますと結局、軍拡競争をおおることになるんですね。その意味で大変国際状況を安定さすんじゃないくて不安定にするから、レーガンさんのSDI構想というのは問題があるんです。動機は非常にいいんですが、結果においては問題がある。けれども、これを二十一世紀の問題として考えれば、これを研究することは、僕は意味があると思うんですね。又、事実皆さんもご存知のABM条約という、アンタイ・バリステック・ミサイル条約というものがあります。弾道弾迎撃ミサイルと訳しますけど、弾道弾がソ連からアメリカにとんでくる。アメリカからソ連にとんで行く、それを迎撃して落とすミサイルのことをABMと申します。そのABM弾道弾迎撃ミサイルに関しまして、米ソ両国は一九七二年に、非常に重要な条約を結んでいるんです。

これは昭和で申しますと四十七年ですな、昭和四十七年、そのA B M条約の第五条に「米ソ両国は、弾道弾迎撃ミサイルの開発・実験・展開は地上からのものであれ、空中からのものであれ、宇宙からのものであれしてはならない」という規定があるんです。研究のことは書いてないですね。研究をやっておっても検証できませんからね。研究をすることは自由ですわ。けれども開発と実験と展開はしてはならないと書いてある。第五条でアメリカもそれを厳かに誓っておるんです。それをレーガンさんは、今年の春からもつとこの第五条はゆるやかに解釈したらいいいじゃないか、展開する時、配備する時には、そらソ連と交渉する。A B M条約に関して交渉する。だけでも開発と実験は広い意味の研究にはいるんで、やってもよろしい、という解釈をレーガンさんはしましたのです。これはレーガンさんがしめたと言うより、レーガンさんにはブレインが居ますから、そのブレインの中に箸にも棒にもかからん程強硬なソ連との取引、交渉、協定、一切価値がないと、ソ連は守らんからそんなことをしても意味がない。それよりもソ連が「グウ」の音も出ない程アメリカの軍事力を強化する他に方法はないんだということを、レーガン大統領に吹き込む極右派のブレインがいるわけです。

その一人がご承知のドクター・テラーという人で水爆の父といわれています。ハンガリーの移民でございまして、移民というより亡命者でございます。だいたいアメリカの政治を動かす上において、アメリカ人は嫌がりますけれどね。その亡命者の発言力というのは、意外に大きいで

す。これは私、アメリカ人にそのことをいいますと皆嫌がりますけれどね。テラーもその一人なんです。恨み骨髄ですから、ソ連に対しては、ハンガリーの亡命者としては、そこでテラー博士、これも七十六才位ですけれども、これがレーガン大統領にSDIのアイデアを吹き込んで、そしてソ連が「グウ」の根も出ないようにしてしまおうということを企んだわけです。ところがこれをヨーロッパ人は心配しだしまして、ヨーロッパのだいたい物理学者、その他の工学者のその方面の専門家の圧倒的多数は、予見しうる将来においては、住民を百パーセント或いは百パーセント近く守りうるような、そういう戦略防衛構想、SDIはこれは実現不可能である。そういう、だいたい結論に到達致しました。、だから予見しうる将来に実現不可能なことを、いかにも実現できるように言っておると、そうするとその結果、米ソ間の軍備拡充競争が激化して、非常に平和のためによくないというんで、ヨーロッパでは、ドイツ・ベルギー・オランダ皆反対なんです。だいたい、西ドイツでは総理大臣は賛成なんですけれども、外務大臣が反対なんです。もうお、揉めに揉めてるんです。

アメリカ合衆国国内でもカーター政権の国防長官をしていたブラウンさんなんかは、アメリカはSDIをやってはならん。これをやると軍拡競争を強化するだけで、アメリカの利益にならんということを、堂々と論文に書いておりますし、だいたい民主党は反対であります。共和党系の学者の中にも反対の人がいます。決してアメリカが全部レーガンさんのいうSDIを支持してい

るわけじゃないのですけれども、中にはレーガンさんの意見に賛成の、テラーさんの意見に賛成の人もおります。そういうふうに見解が割れているんです。意見が割れているところへ、この十一月の十九・二十日にレーガン・ゴルバチョフの会談が行われるが、その時のゴルバチョフの一番の付け目は、ヨーロッパがアメリカと意見が違ふと、アメリカ国内でもブラウン元国防長官だけでなくその前のマクナマラ長官も反対だし、それから、戦略兵器制限交渉の第二期で交渉の任にあたつた責任者のジェラルド・スミスという、私よく知っておりますけれども、大變頭の良い優秀な人ですけど、この人も反対なんです。その反対をうまく利用して、つまり相手を要するに分断すれば勝ちですから、ソ連のゴルバチョフはなかなかそういう点では、平和攻勢がうまくいいますから、分断することに全力をあげているわけです。その第一発が今年の七月の三十日から、核実験を全面的に停止するといひだしたのです。だからアメリカも核実験を全面停止せよ、核実験を停止すれば、核兵器の新しい型の展開ができなくなるから、それで軍拡競争がストップする。凍結するといひだしたわけですね。事実ソ連は七月三十日を期して核実験をやめたんです。それから九月七日号のタイムでは、ゴルバチョフが二時間半のインタビューを行いました。ソ連の指導者がタイムのようなアメリカの著名な週刊誌を相手にして、二時間半も対談するて珍しいことで、それまではだいたひ書面で質問すると相手が書面で答えるというのがソ連式なんです。

ところが今度の場合はどうかといいますと、書面で質問させて、書面で答えたものを渡したうえで二時間半にわたって、そこでもう応酬をやったわけです。それがみなタイムに載っています。大変面白いです。それから更に、今度は割合に最近でございますけれど、攻撃用の核兵器をお互いに五十パーセント減らそうじゃないかという、その提案をしているんです。これは魅力的ですね。だから日本でもさすがゴルバチョフは良くやると言う人もいるんですけれども、良く読んで見ると、これには落とし穴がありまして、お互いに相手方の領土に到達しうる核兵器を、半分に減らそうというのですから、これはアメリカに取って非常に不利なんです。というのはアメリカのヨーロッパに展開しておりますところの核兵器、中距離核兵器パーシング2とか、巡航ミサイルとかは、ソ連領土に到達しますから半分にしなきゃならんが、しかしソ連のSS20なんかはアメリカに到達しませんから、従ってこれは減らさないわけなんです。だからソ連の提案というのは、よく読まないで騙されるおそれのある、非常に毒を含んだ提案ですけれど、しかし一見すると大変合理的なんです。五十パーセント減らそう。その他いろいろ平和攻勢をかけてくるんですから、アメリカの方じやタジタジになりましたですね。平和攻勢をかけるとアメリカの与論は割れておるし、ヨーロッパとアメリカの間にも世論が割れておりますから、そこへゴルバチョフが、楔を打ち込んで来るんです。そこで苦しまぎれに、そのレーガンさんが打ち出した手が、地域紛争でソ連が相当悪いことをしておる。アフガニスタンがそうだと、カンボジアがそうだと、

ニカラグアがそうだと、そういう所の地域紛争というものを排撃する上において、当事者である国の人々が真先に責任を持って解決してもらわないと困るけれども、しかしそれを米ソ両国でもって斡旋しようじゃないか、と言う提案を今度の国連での演説で、レーガン大統領はしとるわけです。

それに対しましてはニューヨークで開かれました六ヶ国の首脳会談で、中曽根さんは、活躍していたらいいですけども、ヨーロッパの方は大分、そのレーガンの提案に対しましては懐疑的でありまして、十一月十九、二十日の米ソ会談では、戦略核兵器の縮少、中距離核兵器の縮少、軍縮、その問題に重点を絞るべきであって、アフガニスタンとかカンボジアとかニカラグアとか出してくると問題が混乱してしまつて、ばけてきてしまうというので、大分、その抵抗したらしいんです。しかしまあ、何とか中曽根さんなんかの努力で、糊塗して、西側の団結をうたいあげて、この会談を終つておりますけれど、そこでいよいよ十一月の十九、二十日に両者がその会談をする。まあ、会談をするだけでいいんで、米ソが話し合わないことに不安があるんで、会談すれば何もかも解決するものでは勿論ありませんし、そこで何か解決の方向が生み出されればいいんで、ソ連としてはSDIを何とか止めさせたい、だからSDIに関して研究だけは認めると駄目だ。というのをいいたい。で、アメリカの方はどうかといいますと、ソ連のSS18、そ

れから最近配備されようとしていますところのSS24、これはSS18よりもっと精度がいいんですね。それからすでに配備をはじめたと言うことをアメリカにソ連が通告しましたSS25、これは単弾頭なんですけれども、非常に精度がいいんです。これをうんと減らすということが、アメリカの狙いでございましょう。

そこで国際テロリズムなんかも問題になるでしょうし、いろんなことが議題になるでしょうけれども、とにかくそこで取引がおこなわれて、何か米ソ両国が大まかに見て、大体この方向で、たとえばソ連の要望に従って、SDIは研究だけに止めようとアメリカが言うかもしれません。何故かといいますと、いずれにしても二十一世紀の問題でございまして、今SDIで現在本当に存在しているものは、二百七十億ドルの予算だけなんです。まだ何にも実体としては存在してないのです。だから仮にアメリカが譲歩しても大きな実質的な譲歩にはなりません。だからアメリカはそこは譲歩するかもしれませんが。常にいざとなったら、開発から配備にのり出すぞということで、それもソ連に対する取引の材料にするかもしれません。それからソ連の方は大型ミサイルを減らすということは、それはソ連にとって痛いけれども、しかしそれをしないとソ連は今、経済的に非常に困っておりますからね。これはもうご承知のとおり、私はごく最近にドイツの雑誌の『シュピーゲル』で読んだんですけれどもね。これは間違いない事実でございまして。じゃがいもや玉ねぎを買うために二時間半ぐらい行列をしなきゃならないということです。

革命が終つてから七十年が経とうという今日ですよ。満七十年になりませんが、もう六十八年経った。その今日、すべての人間がその能力に応じて働いて、必要に応じて受けることのできるはずの、その共産主義時代が近いといわれる今日ですよ。じゃがいもや玉ねぎを買うために、二時間半も行列しなければならんという状態はどんなものでしょう。これは誠にソ連にとつては嘆かわしい事態でございます。そしてソ連の製品の品質が悪いことは、先程兵器で申しましたけれども、すべての商品に関して、ソ連の製品の品質が悪いことは、これはゴルバチョフ自身も認めております。これは競争原理が働かないものですからどうしても品質が悪い。

皆様の中にはソ連に旅行された方も多いと思いますけれども、私も一九六七年に初めて外務省から行つてくれといわれて、行つたんですけれどもね。その後、向こうの科学アカデミーの招待で何回か行きましたけれどもね、事態は緩慢に改善されているような点もありますけれども、しかし基本的にはやっぱり消費に関しては、サービスに関しては、誠に貧しい社会でございます、それは何とか改善して、日本や西ヨーロッパ並に近づけたいというのが、ゴルバチョフの悲願でございます。それをやろうとするとどうしても軍事費を削らないといかん。軍事費を削るためには譲歩もやむをえない。どれほどソ連のサービスが悪いかという例として、今私は、その野菜のことを申し上げたんですけれども、トマトなんかですね。我々が食べますところの新鮮な生で食べられるトマトなんかは、バザールで高い価格を出して買う以外は、国営店では決して手に入ら

ない。だからロシア人は、半腐れになったトマトを料理することは、非常にうまいそうです。トマトというのは半腐れになったものと思つとるんですね。それからホテルの状況なんかでもそうでございます。私はロシアで十ぐらいのホテルに泊りましたけれど、もうちよつと多いかしれません。その中で比較的ましだと思つたのは、それは外国が作つたホテルでございまして、ソ連が作つたホテルは皆、共通して重大な欠陥を持つておりまして、しかもそれが信じられないような欠陥なんです。たとえば、電気スタンドがあるものですから、寝る時に本を読んで寝る癖があるんで、私は電気スタンドをつけようと思つたら、つかない、そこで老眼鏡をかけて、何故つかないのか理由を探したところどうしてもわからない。そこで、翌日聞いてみましたところが、一緒に行つた同僚十人の電気スタンドでついているのは一つもない。皆、駄目なんです。理由は簡単でございまして、こういうコードが電気スタンドにはついていませんね。そのコンセントまでの間のところにスイッチがある。押すスイッチがある。スイッチのようなものがなかなかソ連では手に入らんようです。そこで、そこへ泊つたロシア人のお客さんが缺^{はきみ}で切つてですな、持つて帰つてしまふんです。そのスイッチを、そうするとホテルは又すぐ修理しようにもないんですから、そのスイッチが、しかたがないからその線をつなぎまして、それをテープか何かでまいておく。だから決してスタンドはつかない。それから手洗いに参りまして、私は多少痔があるもんですから、手洗いは非常に私にとって関心が強いんですけれども、手洗いに腰掛ますと、それ

が安定している便座は減多にないんでございまして、たいがいグラグラなんですね。何か非常に、その何ていいますか、不安定なものですから、満足に出るべきものも出ない。というようなことになりました、それから石鹼はどうかといいますと、ちゃんと置いてくれることもあるんですけれども、置いてくれないこともある。それで頼みにいきますと持ってきてくれると、そういうのを頼みに行く時は、まあ、かならずアメリカ製のタバコか何かを、あるいはナイロンのストッキングか何かを持って、それを渡さんといかんてなことをモスクワに住んでいる新聞記者から教えられるという具合です。中には、私は幸運にもそういう目にあつたことはないんですけれども、鍵でこう開けましても、ドアが開かんところ、あるいは鍵のまわらんところが沢山ある。そうすると必ず各階に居るおばあさんの女性に頼まなきゃいかん、そうするとおばあさんの女性 が心得たものでチーンと押しますと、そうすると、タマラ・プレスみたいな体した、こんな体した、ごついソ連の女性が現われまして心得たもので、あゝあの部屋の戸は開かんのだとロシア語で呟いているんでしょう。こっちはわかりませんがね、そしてついて来ましてね。彼女が「グイッ」とやると開くんですな、ドアが、そうすると、もう出入の度ごとに頼まんなんのです。もう憂うつになりましたね。部屋へ一遍入ったら出るのが嫌だし、出たら帰るのが嫌だしということになるんです。

そういうふうな状況でございますので、それを何とか改善したいというのが、ゴルバチョフの

悲願である。ところが自由経済、市場経済の原理を導入して、競争の原理を導入すれば、そういうことはいつべんに解決するんです。そんな欠陥のあるホテルに泊る人はいなくなりますから、改善されるんですけれども、そういう原理を導入して、国有・国営の原理を止めるということは、ソ連ではできませんから、だからいくらゴルバチョフが張切つても、そういう根本的な改善ができないと思うのです。だから根本的な改善ができないので、何とか予防策として、服務規律の強化とか、職場規律の厳正化とか何とかいって、何とか、まあ、そこで取締りをする。それが今の状況でございまして、酒を飲みすぎるから良くないんだといって、午後二時まではアルコールは一切サービスしない。ウオツカは売らない。ソ連の有名なジョークでチェコスロバキアだったと思いますけれども、駐屯しているソ連軍の兵隊さんが、ウオツカ二ダースでしたかな、ウオツカ二ダースと自分達が乗っている戦車とを売買したというんですね。戦車を買った方がじゃそんなもの何につかうのだろうと思つたら、それを考えるのは、日本人的な浅はかさだそうでありまして、向こうじゃ戦車でなもんは、一瞬のうちに解体されて、部品になつてそして残りは屑鉄になつてそしてちゃんと引合ふのです。ウオツカ二ダースなんて安いもんだそうです。戦車兵は、そういうことで大分厳罰に処せられたというんですけれど、それは極端な話だと思ひますけれども、そういう程、ウオツカが好きだ。そのウオツカをゴルバチョフは禁止したわけです。彼はご承知の通りスタブロポリ出身ですから、あの辺の人は、氣候温暖なので余りウオツカ飲まない。葡萄

酒を飲む、ところが北の方のロシアの人はウオツカなしではとても冬を過ごせない。だから下手をするとゴルバチョフはウオツカを禁止したため失脚するかもしれないという観測する人もおるんでありまして、それもあながち笑いごとではすまないかもしれません。
ご清聴ありがとうございました。

（京都大学名誉教授・元防衛大
学校長・青山学院大学教授）